

# 創世ホール通信 No. 289

催し案内 + 文化ジャーナル  
2019年2月1日発行 ■北島町立図書館・創世ホール  
電話：088-698-1100 ファクシミリ：088-698-1180  
〒771-0207 徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91



## 木村大 & アンドリュー・ヨーク GUITAR Concert 2019

2019年2月22日(金)

午後7時 開場：午後6時30分

会場：3階 多目的ホール ※未就学児入場不可

出演：木村大 アンドリュー・ヨーク

入場料：前売：3,000円/当日：3,500円

主催：徳島ギター協会(川竹 ☎088-631-7893)



最年少で国際コンクールを総なめにしたクラシックギター界のプリンス木村大と、グラミー賞を受賞したクラシックギタリスト A・ヨークとの奇跡のデュオが14年振りに実現！「サンバースト(SUNBURST)」や「カリフォルニアの風」など、希代のメロディーメイカー・ヨークの代表曲を中心に披露する。国内外で活躍する実力派ギタリストの共演にご期待ください。

## 人形劇団べんべろべえ公演 2月20日(水) 午前11時～

会場：2階 ハイビジョン室 無料

対象：就学前の子ども 赤ちゃんも大歓迎

内容：「ニャン ニャン ニャーン」ほか

主催：人形劇団べんべろべえ(兵頭 ☎088-698-6652)

## 小宮山博史講演会 誰が明朝体を作ったのか ～その誕生と歴史～

2019年3月16日(土)

午後2時30分～午後4時30分

講師：小宮山博史(こみやま・ひろし)

(書体デザイナー、活字書体史研究家  
佐藤タイポグラフィ研究所代表)

会場：3階 多目的ホール 入場無料

主催：北島町立図書館・創世ホール  
(☎088-698-1100)

漫画・ロック・特撮・SF・幻想文学  
…現代に至るまでのサブカルチャーについて、当館は過去に様々なテーマで講演会を開催してきた。今年は活字書

体研究の第一人者であり、書体デザイナーでもある小宮山博史氏をお招きし、書物に欠かせない活字書体についてご講演いただく。(書影は氏の著作『日本語活字ものがたり』誠文堂新光社刊)印刷物でお馴染みの明朝体、そのデザイン様式は、字面のとおり宋～明代の中国において木版書体として開発されたが、今日の印刷・表示用の代表書体に定着したのはなぜか、また、それは一体誰の手によるものなのか。日本の近代化を支えた立役者でありながら、活字史の中でほとんど語られることのなかった近代明朝体の来歴について、多数の図版を用いてわかりやすく解説する。多数、ご参集ください。





# 文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

## 故郷は地球

～脚本家・佐々木守がめざしたもの◎

S F 特撮研究家★池田憲章

講演採録●2007年2月25日●北島町立図書館・創世ホール

■1話には5話分のストーリーを導入するというのは、佐々木守さんがよく言ったことなんです。1、2、3と考えて、4、5と考えて、1、2、3を捨てて、4、5で1話を書く。人と同じものは書かない。例えば「西遊記」という堺正章さん主演の作品がありますが、「西遊記」の第1話をご覧になったことありますか？ これなんか凄いのは、日本のヒミコが、中国にはこういう物語があるというところから始まるんですよ（笑い）。そこから「西遊記」という物語に入ってゆくんですけど、それぐらい出だして見ている人を驚かせるやり方だったわけですね。

■逆に、橋本洋二さんはテーマ主義というか、佐々木さんのテーマ主義みたいなものに全幅の信頼を置いて、「佐々木がやりやすいように」、あるいは「佐々木の手が足りないのだったら、若い作家を佐々木守にぶつけて一人前に育ててゆくんだ」と、こういう考え方だった。

■上原正三さんと同じように鍛えられたのが、次の「刑事くん」という作品でスタッフになる、市川森一（いちかわ・しんいち）と長坂秀佳なんですね。長坂秀佳は、のちに「特捜最前線」という名シリーズを手掛け、今では小説家、あるいはゲームの原作者として大活躍されていますけれども。

■「刑事くん」という作品も、桜木健一を主役に今度は警察モノをやりたいと。佐々木さんはどちらかというと、体制側の警官の物語なんか書きたくないわけですね（当然「七人の刑事」はやっていきますけど）。でも「刑事」だって人間だ。そこに、もっと若い人間の生き生きとした思いを入れたい、ぜひ君でやりたい、考えてみてくれ」と。そして、東映の平山亨プロデューサーが東映側に立って、佐々木さんが原作とキャラクター創造のために打ち合わせをすることになったわけなんですけども、橋本さんは、「自分は行かなかった」と言っていました。自分が、佐々木さんと一緒に行けば、佐々木・橋本案対平山さんという構図になってしまう。どうしてもテレビ局の方が強いから、平山さんの良さが出ないのではないかと。ここは、平山さんと佐々木にやってもらおう、ということ。

■平山さんは、「悪い犯人を捕まえて何がいけないんですか、佐々木さん」と主張します。佐々木さんは「犯罪にも悲しい犯罪もあれば、怒りの犯罪だってあるんです」と。要するに「人間の犯罪はそんな単純なものじゃないんですよ、平山さん」みたいな議論で、もう大騒ぎになるわけですね。

■その中で個人的な理由、警官だった自分の父親が銃で撃たれて、犯人が見つかっていない。俺が警官になって犯人を見つけてやる、という個人的な理由で警官になる主人公像を作り出すわけですね。平山さんは、いいのかそれで、と。それで正義に目覚めた男であるべきじゃないか、と。

■ぜひ紹介したいのは、「刑事くん」の第3話で、佐々木さんがシナリオを書いた「初恋・千畳河原（せんじょうがわら）」という、タイトルからして凄なお話です。これは、ある犯罪を犯した父親を捕まえるために、その娘さんに一般人の青年として近づいた主人公の桜木健一が、描かれます。娘さんからは、「この人だけは分かってくれる」と思われてなんでも話してくれるようになる。でも自分は任務で追っているわけですから、そこで主人公

はだんだんつらくなっていく。最後に、日光の千畳河原が指定されて、そこで会いたいから金を渡すということで、ついて行って父親を捕まえる。

■これは「京都買います」と構造が似ているんですけど、父親が逮捕され、彼女は泣きじゃくりながら、「これから、すぐ十年二十年、年をとります。これでいいんです。人を信じた自分が馬鹿だった」と言います。そして犯罪を憎んで、犯罪に苦しめられた桜木健一が、犯人を捕まえるという、警察の任務のために、自分が人を傷つけてしまうという構図を突き付けるという、映像的にも素晴らしい作品でした。

■橋本さんは、「初恋・千畳河原」を作ったときに、「ああ、これで『刑事くん』はいける」と。要するに作ってよかったと。この台本を、市川森一とか長坂秀佳に見せて、「こういう方向で行きたいんだ」と。

■すると市川森一さんは、テーマがなくてもドラマは書けるという人ですから（「港町純情シネマ」のような）、人間の喜びと悲しみに限りなく傾斜するドラマを書く脚本家ですから、「（市川）森一は、完全に納得したわけではなかった」と、橋本さんはおっしゃっていました。「それでも森一は、森一のドラマを書いてくれたからそれでいい」と橋本さんは言っていました。一方、「長坂秀佳は何かあったのか、佐々木守の意図を分かって、その線に沿って力作の脚本をあげてくれた」と。

■橋本プロデューサーは、教育大学の育ちの方なんですね。当時グループ・ダイナミクス論という、違う人がたくさん集まった方が、グループの能力が出る。個性あふれる人間が集まった方が、お互いの力が発揮されるというグループ・ダイナミクス論をテレビに応用したプロデューサーだったんですね。自分の意見を言ってくれるのだったら、いくらでも闘うと。納得できないのなら書くなという人ですから。この人の下で、色んな作品と脚本家、監督、役者が育っていったんですね。

■佐々木守さんは、冒頭申しあげましたように、物語の持っている、見ている喜び、本を読む喜び、一つの物語世界の中に現実を忘れて飛び込んでいく貴重な時間の喜び、というものを知っていますから、実は、少女マンガとか、マンガのテレビドラマ化にもかなり踏み込んだ方です。

■その中で代表作といえるのが、「おくさまは18歳」ですね。「おくさまは18歳」というのは、もともとはヨーロッパを舞台にした話だったので、それを日本の高校に移すために、人物も何も、全部佐々木さんが名前を付けてやったんですね。台本がいきなり教会の結婚式みたいなものから始まって、「あなたア〜」みたいなセリフばかりなので、TBSの最初のプロデューサーが「なんじゃこれは、マンガじゃねえか」。それはそうです。マンガが原作なんです。「こんなのはできん」と。それで、橋本さんはそれを横で見ている、だったら俺がやるかと。

■ところが橋本さんは、これはこれでいいんだけど、演出が軽いタッチでできないと、これはまずいぞと。それで、実は、大映で「ガメラ」シリーズを撮っていた湯浅憲明という監督がいらっしゃるんですが、この方を引っ張り出すわけですね。湯浅さんは僕をもう二回り大きくしたような丸い体型の方なんですけど、この方が、実は増村保造とかですね、川島雄三の大映の東京スタジオの助監督だった。また、石原裕次郎を撮った井上梅次監督が師匠だった方なんですね。ロジェ・ヴァディムとか、あるいはブリジット・バルドーなんかの、フランスのちょっとセクシャルな人間喜劇みたいなのをどこかでやってみたい、日本ではチャンスがなかった。渥美マリなんかではもう撮っているんですけどね。

■湯浅さんは「おくさまは18歳」の話が来たときに、橋本さんと目が合ったときに、「橋本さん、軽くですね、「軽くだよ、湯浅君」、「分かっています

よ、橋本さん」と理解しあえたぐらいリズムがあった。ですから、オープニングのアニメーションというのは、湯浅さんのアイデアなんですね。

■そういう監督にも恵まれて、「おくさまは18歳」が人気を博した。橋本さんは、「世間の人、『おくさまは18歳』は岡崎友紀と石立鉄男に合わせてできたというだけだけれども、あれは佐々木のシナリオに役者たちが寄って行って出来たんだ」とおっしゃっていました。そのキャラクターたちの軽み、当時、世の中では、学校が管理社会化しているような状況になっていたときに、先生と結婚している女の子がクラスにいる、しかもその女の子が魅力的なもので、他の先生なんかもどんどんちよっかいを出してくる、という、ある種永井豪さんのセンスに近いようなことを、テレビドラマの中で切り開いたのが佐々木守だったんですね。だから、そのあとの「ママはライバル」みたいな形の若奥様モノみたいなものや、アニメの「うる星やつら」や「タッチ」などのラブコメと言われるもの、はるか先駆をなす作品なわけですね。そこら辺から見ると、佐々木さんは、重い社会派だけの方ではなかった。とにかく幅広いものを生み出す人だったわけですね。

■実相寺さんや佐々木さんは作品に様々なものを込めたわけなんですけど、そこにあるのは「人間の視点」という問題ですね。「怪奇大作戦／京都買います」でも、そこで岸田森がたじろいで見つめている青藤チヤ子への思い、人間のそういう視点というものをキャラクターの中に結晶化して、物語のダイナミズムを生んでゆくということをやった脚本家です。

■例えば「三日月情話」では、昼メロに浦島伝説と人間蒸発の謎を絡めた騎馬民族日本征服説とか、或いはニライカナイ～海の向こうに常世の国がある、そういうのを昼メロでやった。「三日月情話」は、全35話の34話で物語が終わって、35話でいきなりナレーターの渡辺美佐子さんが渡辺美佐子として現われて「この物語を今までご覧になっていただいて、ありがとうございます」みたいなことを述べて物語の背景を解説するわけですね。三日月の光の影になってる暗い部分の中にもう一つの人生の真実があるんじゃないかというのが、佐々木さんと演出の真船禎さんと話し合っただけで作り上げた物語です。最終回は全編総集編のようにして、作品の意図が語られます。昔、日本列島に住んでいた人たちが大陸から来た騎馬民族に追いやられてしまった、それが現在の日本の体制になったということ、実験的に描いた作品ですという趣旨のことを、最終回丸ごと使って解説する訳です。佐々木さんは「自分は田舎者だから」っておっしゃってました。石川県の60戸の村で育った。その村のはずれに火葬場があって、その向こう側に日本海の夕陽が落ちて行って、その情景は佐々木さんにとって原風景なんですね。

■佐々木さんが作品の中でやったのは「もっと解放されて欲しい」ということですね。解放されたときに初めて、自分が誰であるかということが分かってくる。「故郷は地球」という言葉をあの方がよく使ったのは、僕らは地球人であると同時に現代人であって欲しいということですね。それは「三日月情話」のように闇の中の一見見えないところの問題に気が付いた方が、人生が豊かになる、物語が人生に生きてくるということ。物語が生きていなければ現実が逆照射されない。物語を鏡に僕らが見えてくる世界というものを実相寺さんや佐々木さんが延々とやろうとしたのだと思う。幸い、今、BS放送などで実相寺さんや佐々木守さんの作品が見られるようになっています。作品というのは、作品がただあるだけではなく、熱く作る人と熱く見る人がいて成立するというのをぜひ分かっていただきたい。ぜひ数々の作品に関わった人たちの熱い思いを作品の中からも取り上げていただけたらと思います。今日は、長い時間をおつきあいいただきありがとうございました。（完結／採録・文責＝小西昌幸）★★★